曇天小屋 PRESENTS

戦慄怪奇ファイル

コワすぎ!

史上最恐の劇場版

非公式報告書

作成者：白石晃士

作成日：2014/5/3

一、この書を「戦慄怪奇ファイルコワすぎ！」というビデオシリーズを作っている工藤仁という男へ送ること。

二、「コワすぎ！ファイル04」を見て、この世界に起こりつつあることを悟った。工藤に希望を託す。

三、遺した袋には、私の命と引き換えにある呪術を施した。工藤が使っている毛髪の呪具を袋に入れておけば、呪力が増大し、必殺の呪具となる。また、呪具が袋の中にあるうちは、呪いが漏れることもなく、所持を察知されることもない。この袋を工藤に送ること。

四、工藤よ、やるべきことをやれ。救うべきものを救え。

大井里子

前作「戦慄怪奇ファイル 劇場版・序章【真説・四谷怪談　お岩の呪い】」に登場した遺書。

FILE-01 に登場した呪術者が、暴力ディレクター工藤に希望を託して自ら命を絶った。

戦慄怪奇ファイルコワすぎ！の世界へようこそ。

劇場版を含む『戦慄怪奇ファイル　コワすぎ！』シリーズを
全て監督しております、白石晃士（シライシ・コウジと読みます）と申します。

コワすぎ！シリーズ“史上最恐の劇場版”について
非公式報告書にまとめました。
コワすぎ！を楽しむ一助となれば幸いです。

なお、本非公式報告書における記述は全て私の手によるものです。
自分で自分のことも書くというかなり恥ずかしい行為になっておりますが
全ては映画とその未来のために、恥を忍んで書かせていただきました！

２０１４年５月３日　白石晃士

INTRODUCTION

「ノロイ」「オカルト」「グロテスク」「カルト」などで
カルト的な人気を得る白石晃士、執念のホラーシリーズが遂に！
シリーズ最恐のスケールとビジュアルと荒唐無稽さに溢れた
史上最狂の劇場版となって解禁————ツッ！！！！！！！！！！！！！！

２０１２年から始まり現在まで５作がリリースされているビデオシリーズ「戦慄怪奇ファイル コワすぎ！」。これはＰＯＶ（主観映像）手法によるフェイク・ドキュメンタリー（ドキュメンタリーという設定のフィクション）だ。勢いだけのディレクターの工藤仁（クドウ・ジン）が、ちょっぴり可愛くてちょっぴり反抗的なＡＤの市川実穂（イチカワ・ミホ）をこき使い罵倒し蹴り上げ、時には取材対象者を暴力で脅し、ヒットする物凄い映像をものにするためなら軽犯罪も辞さない強行横暴取材スタイルで、ヒーヒービビりながらも大事なものにカメラを向けることを忘れない執念のへっぽこカメラマン田代正嗣（タシロ・マサツグ）を引き連れ、３人で様々な怪奇現象・超常現象に取材・検証と称して挑んでは最悪の事態を招きまくる、小中学生（とその心を持った大人たち）向けのとっても楽しいホラーシリーズ。

今回の劇場版では、今までの謎と前作「劇場版・序章」の内容を引き継ぎながらも、シリーズ初見の観客でも楽しめる見どころ満載の内容となっている。しかしもちろん今までのシリーズを見てきた人が思わずニヤリとなる箇所や、シリーズを見てきたからこそより戦慄する箇所やより感動する箇所も用意されている、全方向型にお楽しみ要素の詰まった、てんこ盛りのチャンポンまたはヤサイマシマシニンニクアブラカラメのラーメン二郎のような過剰な特濃サービス精神で貫かれた最狂の劇場版だ。

今回はついに、主人公であるディレクター工藤のドラマが最高潮を迎える。舞台は、訪れた者は必ず発狂し死に至ると言われている、山奥の危険地帯“タタリ村”。そこへ、序章でも登場した性格に難アリの横暴霊能者・宇龍院道玄、アイドルの小明（あかり）、物理学者の斎藤雅彦がゲストメンバーとして加わり、現地の検証を行うのだが・・・一行を待ち受けていたのは恐怖と阿鼻叫喚の最悪の結末だった。窮地に追い込まれた工藤・市川・田代の３人は、遂に一線を越え、常軌を逸した行動に打って出る。もはや全・員・発・狂！！！！
工藤の原動力にはいつも頭の中に聞こえる声があった・・・「“運命に逆らえ”ってな！」
３人の運命や如何に！？

シリーズ開始当初は誰も注目しなかったホラービデオシリーズが
クチコミで徐々にファンを拡大！
超低予算ながらもアイデア勝負でＰＯＶ表現に歯止めなき挑戦と冒険！
「戦慄怪奇ファイル　コワすぎ！」が映画の歴史に新たな伝説を作る！

白石晃士が「伝説のシリーズを作る」という目標を掲げて製作を始めた「コワすぎ！」シリーズだったが、ＤＶＤ業界レンタル業界全体の不振もあって、他に比べて悪くもないが特別良いわけでもないという業績が続いた。メーカーであるアルバトロスも作り手も「見れば面白いはず」という思いがあり、事実業界内での評判は高まっていったが、業績が付いていかない状況は続いた。「存在が周知されれば、見られれば、これは絶対に売れるはず」・・・そう踏んだメーカーが下した決断が“劇場版”の製作であった。白石もこの提案に大いに乗り、歯止めナシのあまりにも冒険に過ぎるプロットを書き上げ、ＯＫは出ないのではないかとの危惧もあったが、メーカーはこの冒険を後押しした。

白石の代表作のひとつである『グロテスク』に主演し鬼気迫る殺人鬼を演じた大迫茂生がどこか愛嬌のある暴力ディレクター工藤を演じ、白石が『超・悪人』のワンシーンの出演から見出した久保山智夏が工藤のパワハラにめげないＡＤ市川を演じるというシリーズを通した鉄板コンビはそのままに、インディペンデント映画界の生きた伝説である某監督が謎めいた役でゲスト出演し、『クソすばらしいこの世界』でアクの強い演技を見せ自らも劇団を主宰する大畠奈菜子が冒頭の投稿映像に出演しその美貌で最初の恐怖を彩る。アイドルでありライターでもある小明（あかり）は本人役で登場、自然体の演技とともに本人の持ちネタであるゾンビ芝居で鍛えた狂気の演技を見せる。そこへ白石が詰め込んだビジュアル・ショックと生理的に訴える不気味さ、劇場版ならではのハードで読めない展開が見る者を引きずり込む。

公開直前に行ったニコニコ生放送でのＦＩＬＥ－０１から劇場版・序章までの一挙５本連続上映には何と１０万人を越える来場者数と２０万を越えるコメントが付きアンケートでは８６．７パーセントが「とても良かった」を選び、Twitter のトレンドに「コワすぎ」というワードが上がり、劇場版公開に先駆けた渋谷アップリンクでの過去シリーズ上映には、旧作にも関わらず毎日観客が押し寄せている。期は熟した。劇場版の公開を皮切りに、『コワすぎ！』はこれから本当の伝説を作るのだ！あなたは伝説の目撃者となる！

STORY

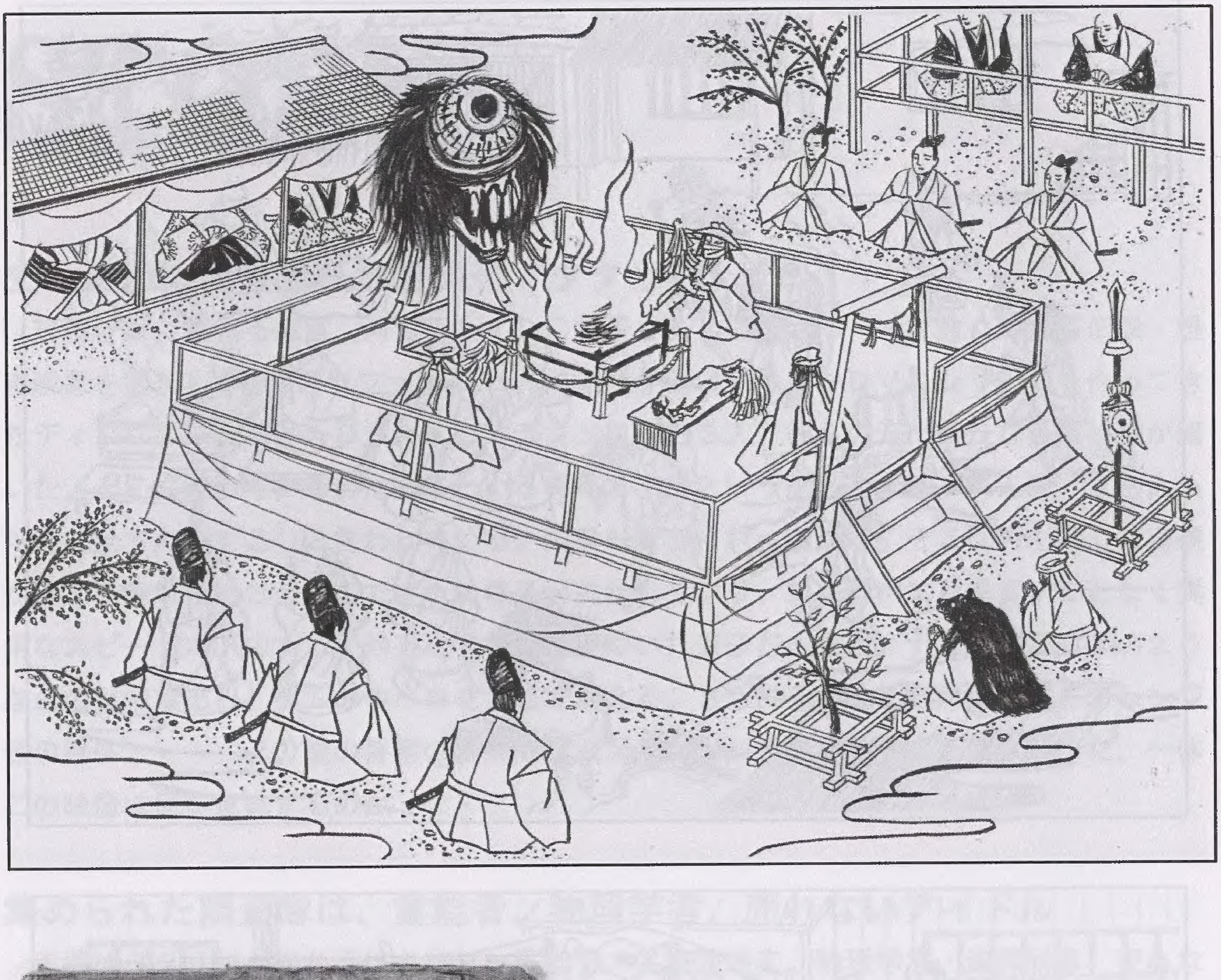
史上最恐の全員発狂危険地帯“タタリ村”

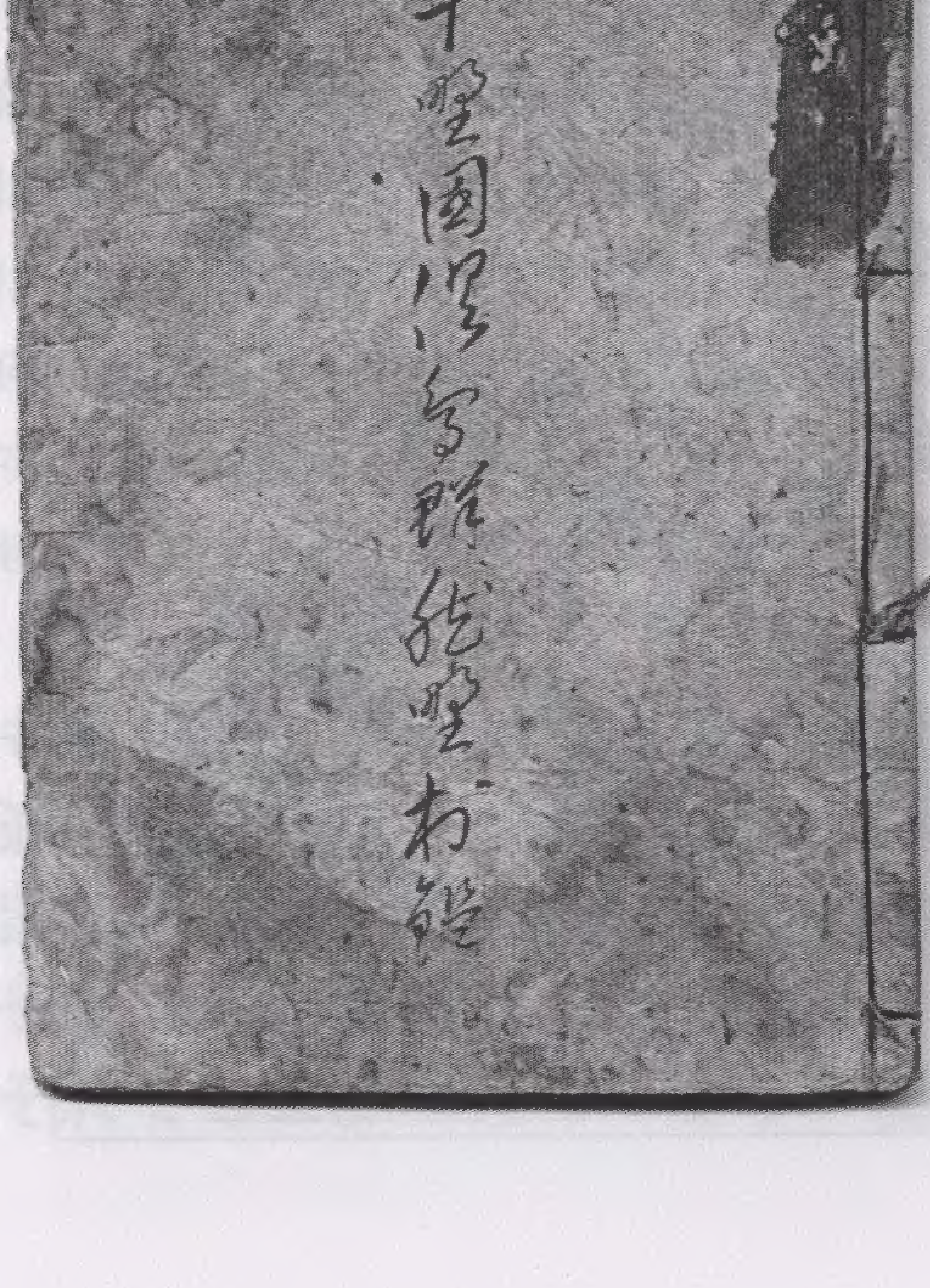
口裂け女、震える幽霊、河童、トイレの花子さん、お岩さん・・・数々の都市伝説・怪奇現象を調査し『戦慄怪奇ファイル コワすぎ！』というホラーＤＶＤシリーズを作ってきたディレクター工藤とＡＤ市川、カメラマン田代の３人。彼らの元に新たな投稿映像が届いた。そこに映っているのは金子という青年とナナという美しい女性。二人は“立ち入った者は全て発狂する”と言われている、山奥のタタリ村へ向かう。そこは朽ち果てた廃屋が連なる廃村だった。そこでナナの様子がおかしくなり、兼子の声に耳を貸すことなく異常なスピードで下山する。やっとナナに追いついた兼子だったが、ナナの口から手のようなものが飛び出し、ダムの中へ身を投じて消える。さらにその時、空に飛来するオレンジ色の物体・・・。その後の警察の捜索でダムからナナが発見されることはなかった。一体この映像は何を意味するのか・・・？

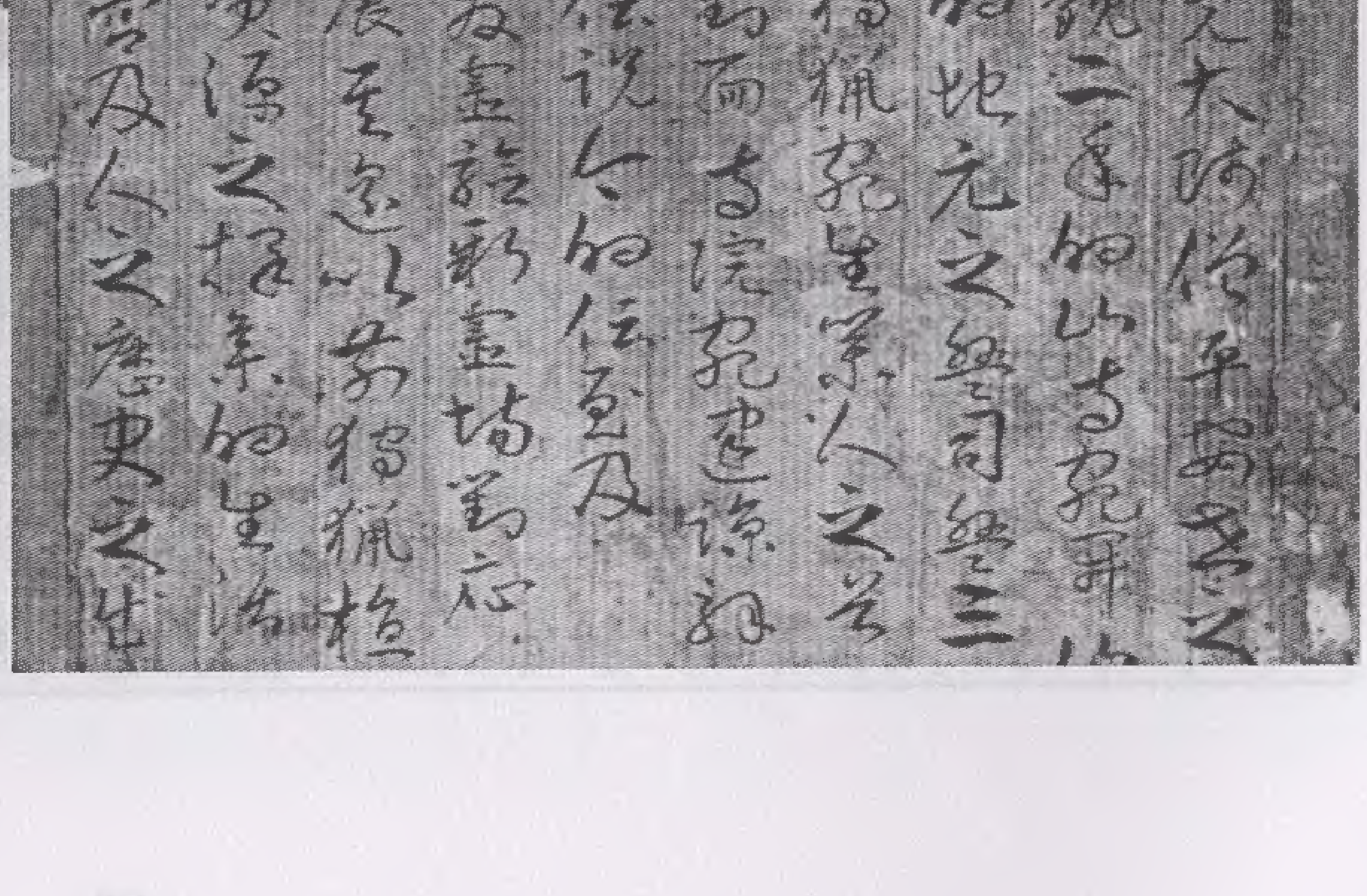
集められた調査隊は、霊能者、物理学者、売れないアイドル

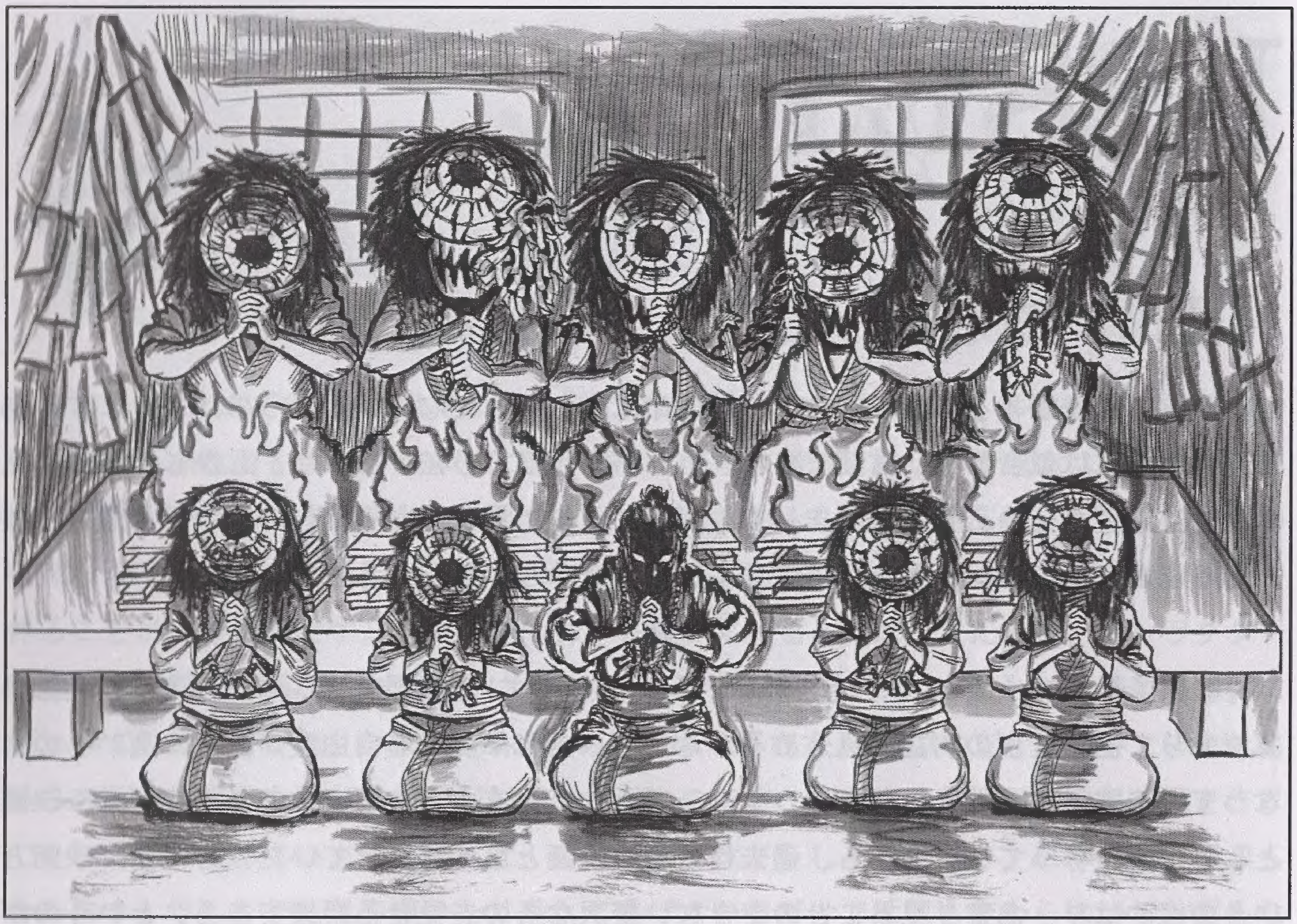
工藤はタタリ村へ向かうにあたり、霊能者・宇龍院道玄、物理学者・斎藤雅彦、売れないアイドルの小明（あかり）をゲストとして連れていくことにする。それぞれ癖のあるキャラクターなだけに、衝突を繰り返しながら山へ向かう。山には誰かが殺したに違いない動物の死骸、儀式を思わせる不気味な石積みのオブジェなどがあり、機器で検査した斎藤は異常な放射能の数値を探知し、お祓いを始めた道玄の体には無数の白い手が這い、小明は発狂して斎藤の首を絞める。工藤に殴られ正気を取り戻した小明だったが、道玄は空に何かを察知し「やはり神は・・・バケモノだ！」と言い残し、発狂して山の奥へと走り出す。工藤は斎藤を殴りつけて強引に道玄の追跡へ同行させる。残された小明の身に異変が起こり、山の奥で発見した道玄もまた、普通の状態ではなかった・・・。

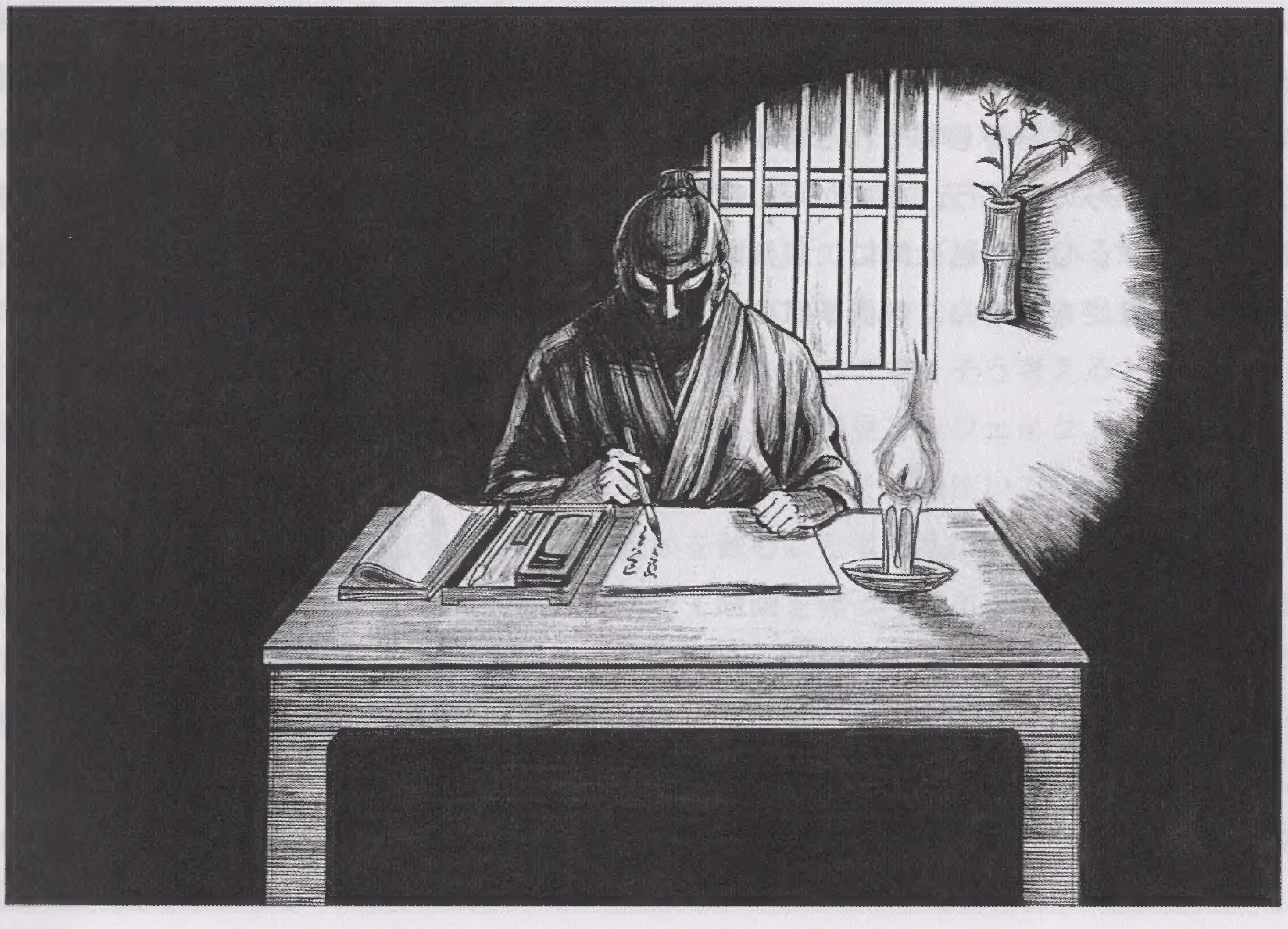
もはや立ち向かえないほどの超異常現象を前に成す術なし！
追い詰められた工藤ら撮影クルーはついに一線を越える！
旧日本軍と呪術の村のつながり、巨人の誕生・・・
そして迎える怒涛のクライマックスと信じがたい衝撃の結末！！！
それでも工藤は運命に逆らい続けるのか！？！！！！！！！！！！！











ESSEY

「運命に逆らえってな！」に込めたもの

予告編にも登場する工藤のセリフで「運命に逆らえってな！」というのがあります。あまりホラーには似合わない言葉ですね。言い方もけっこう熱いですし。しかしこれには私の怨念と希望が込められておりまして、同時に『史上最恐の劇場版』の劇中でも最も重要なセリフであることが、見た後の皆さんにはお分かりいただけると思います。

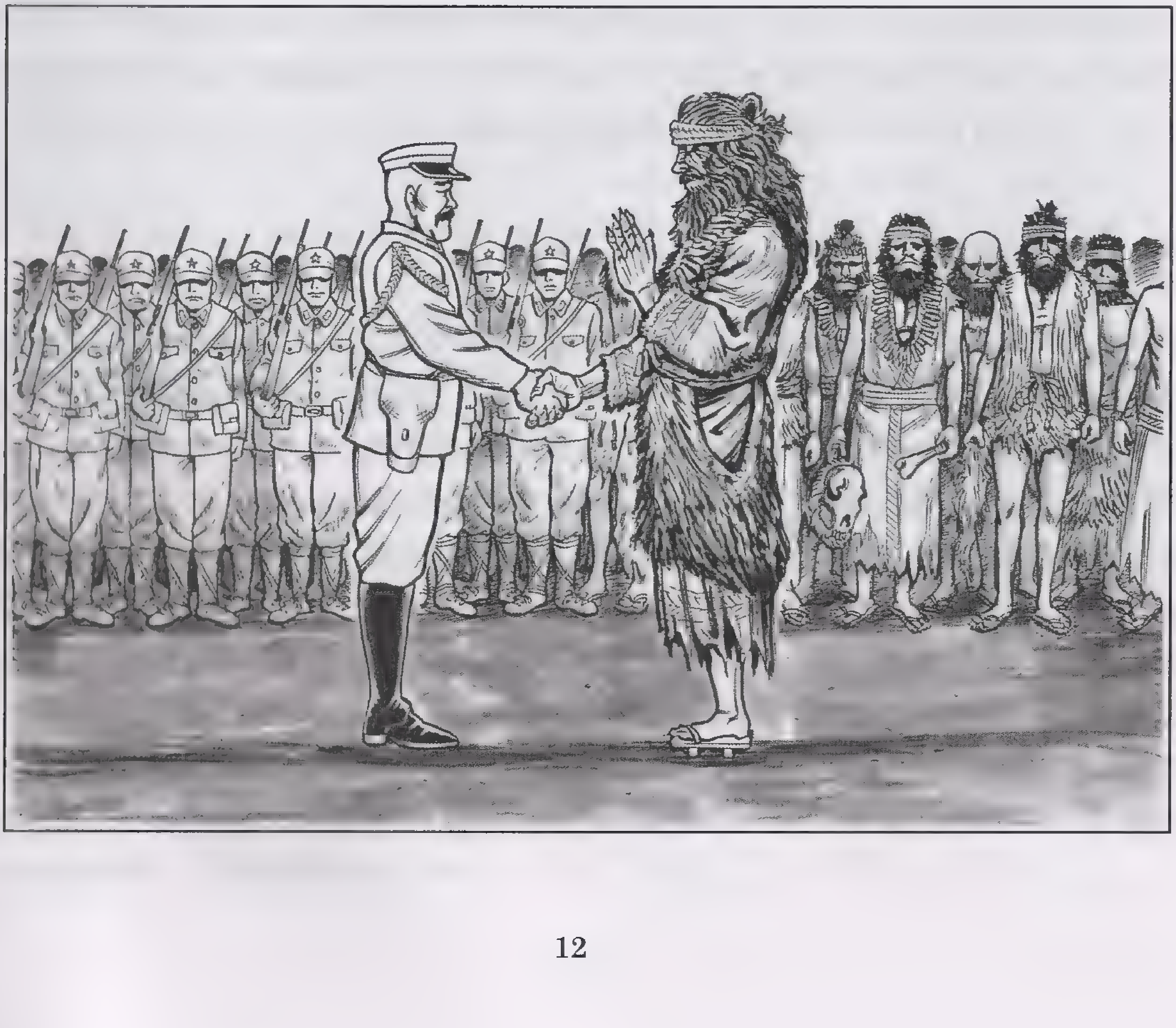
『戦慄怪奇ファイル コワすぎ！』というシリーズは、超低予算のシリーズです。超低予算であり、ある程度の利益が見込めるからこそ、内容に関する自由度が非常に高いものとなっています。自分としてはＤＶＤシリーズとして始まった企画ではありますが常に映画として捉えて作っていますから、過去作も含め映画として語らせていただきます。映画というのはやはり、あまり見ることのできない贅沢なものを見せる娯楽である、というのが基本のはずです。それは、お金をかけた映像という意味でも、秘境という意味でも、気持ちの良い美しさという意味でも、醜悪さや不快さという意味でも、人間の感情という意味でも、アイデアという意味でも、やはり、贅沢を尽くした結晶であることが娯楽映画の基本だと思うのです。そしてそれらを映像にするためには、多くの場合お金が必要だということもお分かりでしょう。ですから、超低予算映画というのは娯楽映画という立場では非常に不利です。しかし私は常に、娯楽映画をやりたいのです。どのような場合も、それを諦めることはできません。超低予算のＤＶＤシリーズでどのような贅沢を見せることがで

きるのか？ 『コワすぎ！』はそこから全てが出発しています。本来、多くの人を満足させられるような映画を作るのが非常に難しい状況です。環境という名の運命に従うのであれば、面白い映画にはできません。全てを受け止めながらも流れに逆らい、そこに自分がいなければあるはずのなかった、信じられないような面白い流れを作ってこそ、娯楽映画を作ることができるのです。プロットや脚本を書いているときは、ただただ、キャラクターが動くのを待って面白くなるようにします。しかし結局、そこには私という要素が自然に加わっているんですね。つまり、今の私の理解はこうです。『コワすぎ！』の中で描かれているのは、今の私を取り巻く映画製作の状況なのです。あらゆる条件が、娯楽映画を作りにくい方向へ向いています。それは、自分の力ではどうしようもない、日本映画の状況も含みます。でも、それらを嘆いたり恐れて逃げているだけでは何も変わらないし希望もない。だから私は怨念と希望を込めて、どんな状況でもどんな予算でも、あらゆる現実と向き合いながら娯楽映画を撮っています。ちょうど私にはフェイクドキュメンタリーという手法の武器があり、これは面倒な手続きさえ踏めば娯楽映画にとって強力な万能の利器となります。対予算という意味でも、娯楽に大切な臨場感という意味でも。『コワすぎ！』の中に登場する異界や魔物や人の死や失踪というもの、そして借金を抱えながら『コワすぎ！』というホラードキュメントで一獲千金を狙う工藤も、全ては私が感じている環境をデフォルメし誇張してフィクションとしての娯楽映画にしているものなのです。当初はそんなこと考えもしませんでしたが、無意識的にそうやっていたのです。そう考えるとあらゆるものが腑に落ちます。呪いの髪の毛は、私にとって不意に発見したフェイクドキュメンタリーという手法のメタファーのような気がしてなりません。それは使い方によっては途轍もなく有効であると同時に、自分を、そして誰かを蝕むこともあるのです。しかしこのあたりのことにあまりに客観的で自覚的になりすぎて映画を作ってしまうと、映画の力が失われてしまうことを私は知っています。恐らくそれは、映画を製作するのに向かない脳の状態なのでしょう。映画は主に無意識で作らねば、自分すら驚くようなものにはなり得ません。自覚的過ぎては、意味づけばかりで生命力のないものになってしまいます。だから、今ここで書いていることは、普段の映画製作に戻ったときは努めて考えないように、忘れるように努力します。 （次ページへ→）

私の考える運命というのは、一般的な運命とはちょっとズレているかもしれません。私の考える運命は、自分の意思とは関係なく進行している流れの事です。自分を取り巻くあらゆる外的環境ということですね。降りかかる災難もそうです。つまり、現実そのものです。しかしその現実は、自分の行動によって大きく変わっていきます。自分の意思によって環境を、現実を変えていく、それこそが私にとって「運命に逆らう」ということです。そのためには、運命たる現実に向き合い、受け止めたうえで、現実をどのように利用しつつ流れを変えていくか？ ということが最大のポイントになります。私は映画において、周囲に存在する要素をなんでも利用しようとします。人も物も、自分も含めたあらゆるものをです。ときには人を騙したり、ゲリラ撮影という軽犯罪を行ったり、映画のためには基本的には手段を選ばないつもりでいます。たとえば私自身は映画に出演するのが嫌なのですが、それでも出演するのは、それが現実と向き合った時にその映画に対してもっとも有効なキャスティングであると自分で判断するからです。そう判断しない作品では出演していません。私の肉体も、映画にとっての道具なのです。どんなことをしても、この環境の中で面白い映画を作る・・・あらゆる映画はそうですが、超低予算ではなおさらです。

『コワすぎ！』の世界と私の環境がリンクしているから、私にとっても『コワすぎ！』の世界はスリリングです。このシリーズが悲劇に終わるのか、大団円で終わるのか、私としては大団円で終わって欲しいと願いますが、キャラクターたちの動きは、映画は、そうはならないかもしれません。企画のスタート時はＦＩＬＥ－０２までしか考えていませんでしたし、その後も基本的には後先考えずに、過去作の内容を踏まえながら目先の作品だけのことを考えて作っています。大まかに先のことが浮かんでいたりはしますが、その通りになったことならなかったこともありますし、いずれにせよ、シリーズはこの劇場版では私が全く予想していなかったところへ着地してしまいました。現段階で、この後をどのように再開するのか、明確なアイデアがあるわけではありません。普通に考えれば、劇場版をすでにご覧になった方は分かると思いますが、あの先をどう続けるつもりなのか考えていたら、あんな終わらせ方はさせないでしょう。非常に困った事態になっています。しかし、だから面白いのです。現実と同じように未来はどうなるか分からない。現実と同じように、どうにもならなくなってしまった劇中の世界を、映画の文法にのっとって、新たな発明もしつつ、壁をブチ壊して進んでいくのです。そう、運命に逆らって。

劇場版の後に続く『コワすぎ！』にもぜひご期待ください。驚くような画期的なアイデアは幾つか浮かんでいます。運命に逆らいながら、運命という現実を楽しみながら、この物語が良きタイミング終了するまで、私自身もスリリングで未知数な展開を、ときに戦慄し、ときに熱くなり、ときに絶望し、ときに笑いながら、楽しみたいと思います。　（終）



CAST

大迫茂生（工藤仁）

大迫さんに会ったのは『グロテスク』のクランクインの前日か２日前か、そのあたりでした。主人公のオファーをあらゆる俳優に断られ続け、ついにプロデューサーから「ここは知り合いの劇団やから、誰でも出てくれますんで、もうこの中から決めて下さい」と言われ、ネットで顔写真のツラ構えを見て「あ、いたな」と思ったのが大迫さんでした（今はその劇団を辞めてます)。今考えても、よくあれだけセリフが多くて異常な役を直前に引き受け演じてくれたものです。大迫さんは、一見ミステリアスそうに見えるんですが、本質は庶民なんだと思っています。どんなに過激なことや汚いことをやったり言ったりしても、そこに庶民としての意識があるというか、どこか理解できる部分が残るというか。それが、工藤の愛嬌になっていると思います。今後は工藤の小物体質や暴力性や勢いばかりのキャラクター像に加えて、もう少し大迫さんならではの庶民性の魅力を引き出せる展開はないかなと考えているところです。ちなみに工藤のキャラクターは『ありふれた事件』のベンや『ゴーストハンターズ』のカート・ラッセル、『ＡＫＩＲＡ』の金田などを参考にしています。そこを考えてもやっぱり、根本に庶民性は求めているんですよね。

久保山智夏（市川実穂）

彼女と出会ったのは『超・悪人』です。その中のワンシーンで、罵倒されるメイドの役を演じてもらったんですが、そのときの芝居がフェイクドキュメンタリーの素養があるなと思わせてくれて心の中に残っていて『コワすぎ！』の出演オファーへと繋がりました。彼女は、このシリーズを通じて色んな魅力を見せてくれていて、私が考えていた市川というキャラクターとはかなり違う市川になってきました。当初は、タガの外れた工藤に対しマトモな倫理観をぶつけるマトモな女性というざっくりしたイメージだったのですが、久保山さんの持つ天然さや、意外と心無い対応をする（それも魅力なんですよ）辺りが役に入り込んできて、私の考えていたのとは違う意味で面白いキャラクターになってきました。『劇場版・序章』のときのとり憑かれた芝居で見せた思い切りの良さも意外なものでした。今後はもうちょっと彼女のブラックな部分を掘り下げたいと思っています。

白石晃士（田代正嗣）

ときどき気づかれますが、田代のビビり方はヘイポーさんを参考にしています。やっぱり、大の男でもワーワーギャーギャービビってると、周囲もつられて怖くなってしまうんですよね。ヘイポーさんが怖がらせられる様を見ているとよく分かります。あれを参考に、劇中で起こっていることにリアクションで説得力を持たせているわけです。そして、カメラマンは冷静であることが多いわけですが、ＰＯＶ形式で人が回しているカメラが冷静では、写っているものが恐ろしくても見ている人が冷静な視点のフィルターを通すことになりますから、カメラマンがビビりじゃないとダメなんです。本当は、女性カメラマンがビビってくれてた方がいいんですが、実際に撮影するとなると私がやった方が効率が良いと判断して、結局私が進んで田代役になりました。直前まで迷っていましたけども。

宇賀神明広（宇龍院道玄）

宇賀神さんとはかなり昔、ちょっとした仕事でご一緒したことがありまして、非常に真面目な方なんですね。と同時にやはり前に出たいという気持ちも強く持っていて。あと、真面目がゆえの気難しい感じや自分の世界を持っている感じがあって（それはあくまで微妙な印象で、実際に気難しさを向けられたことは無かったんですが）、その印象が残っていたんですね。それで、『劇場版・序章』『劇場版』をやるときにある程度説得力のある年齢の霊能者役の男性が必要ということになって、宇賀神さんに辿りつきました。最近はご自分でワークショップや舞台を主宰されていて、人の作品に演者として出ることは少なくなっていたそうですが、ノリノリで癖のある役をやっていただきました。

小明（小明）

昔、脚本を書きながらＧｙｏの番組をよく見ていた時期があって、そのとき小明ちゃんも番組をやっていて、かなり屈折した感じだけどかなり可愛くて、屈折感が面白いなーと思ってよく見ていたんです。そのときから、いつか出てくれないかなーと思っていました。今回、初めてお会いしましたが、まず非常に美しいですし、声が特徴的で魅力的ですね。そしてトゲのある雰囲気というか不満げな雰囲気を出してもらうとキャラクターに魅力がグイグイ増してきました。フェイクドキュメンタリー的な芝居もとても達者で、アドリブをバンバンきめて、生き生きとした魅力的なトゲトゲしさがあって、もちろんキチガイ芝居の方も思い切りが良くて素晴らしかったですね、あんなに美しいのに。小明ちゃんには今後もまたぜひ、ご登場願いたいです！

金子二郎（斎藤雅彦）

物理学者の役は、もちろん大槻教授の偏屈さをイメージしたキャラクターです。これもキャスティングが難航しましたが、プロデューサーの田坂公章さんと助監督の中川究矢さんの２人から勧められたのが二郎さんでした。金子修介監督の弟さんで、脚本家で、話し好きで弾き語りもすると聞いて、ＹｏｕＴｕｂｅで探してみたらまさに二郎さんがイベントで歌う映像がアップされていて、その人前で話して歌う姿を見て二郎さんに決めました。二郎さんは、変人のようなことはしないのですが、なぜか変人のような魅力を感じてしまう方です。斎藤というキャラクターの偏屈さと子供っぽさは、きっと近い要素をお持ちなんだと思います。アドリブも含め、斎藤のキャラクターを二郎さんのものにしてくれました。

大畠奈菜子（大畑奈々）

大畠さんを推薦したのはプロデューサーの田坂さんです。ホラー秘宝の映像で仕事をご一緒したことがあって、その映像を見せてもらいました。すると、えらく美しい顔立ちの女性です。そしてある理由で体が動かせる人が良かったのですが、その辺りもバッチリというお話でしたので、会う前に決めました。『コワすぎ！』の撮影が終わってから『クソすばらしいこの世界』を見ましたが、あの後半の彼女もいいですね。大畠さんは、あれだけの美しさがあるのと同時にかなり性格をこじらせた張りつめた部分・・・そういう殺気や反抗心があることと、あどけない顔なのに低くてセクシーな声をしているので、そのアンバランスさがちょっと他の人にはない異様な魅力になっています。今回は普通っぽい役で出てもらいましたが、次回は人ならざる役やどこか過剰さのある役で出てもらおうと思っています。美しいがゆえに、バケモノのような役が合うと思うんです。

金子勝（金子鈴幸）

ＦＩＬＥ－０１に浮浪者役で出演した仁科貴さんが、ＦＩＬＥ－０４の撮影中に現場へ遊びに来た時に連れてきていたのが金子くんです。彼は金子修介監督の息子さんで、役者ではありませんが、とても映画が好きで、私のファンなのだそうです。冗談で「じゃあ今度出ますか？」と話していて実際に出演の運びとなりました。彼はフェイクドキュメンタリーが好きだと言うだけあって、そういう類の芝居の勘が良く、狂ってしまったシーンでは思った以上にナイスなキチガイっぷりを見せてくれました。ちなみに、金子二郎さんとともに金子家のお２人がそろったのは偶然です。

VFX

頼める人がいないから自分でやってしまったＶＦＸ

今回私が、ＶＦＸも手掛けております。異世界の背景は前回に引き続きスタジオバックホーンの鹿角さんが作ってくれた素材をちょっと色を変えたり動きを変えたりなどして使いまわし、いくつかのバレ消し的な合成は編集の宮崎さんにお願いしましたが、他は私がやりました。いつからこういった合成を手掛けるようになったかというと、本格的にはＦＩＬＥ－０４があたりからなのですが、超低予算のため人に頼める予算が無いので、しょうがなく自分でやろうと思って始めた次第です。ですから、素人なりにやってる感じです。イメージするビジュアルになかなか近づけないのですが、それは今後スキルアップしていくつもりです。

自分でやるうえでの問題は時間がかかること、チープな路線でやるしかないこと。利点は別枠のお金がかからないこと、チープながらも独創性はダイレクトに反映できること、です。今後のためにも合成の基本的な知識は身につけておいた方が有効だという思いもあって、やっています。シリーズ最後の時は、身につけたスキルを総動員して凄いものを見せようと思っています！どうぞご期待ください。

「コワすぎ！」でのＶＦＸの根本にあるのは、どんなにチープでもカメラが捉えたという演出にのっとること、生理的な不気味さを出すこと、です。かつ、フェイクドキュメンタリーだからといって遠慮することなく大胆な色や映像にすること、これを両立させることが面白いと思っています。大林宣彦監督が合成する世界観や、横尾忠則的なサイケな色使いやレイアウトなどは意識しています。フェイクドキュメンタリーでも、面白ければどんどんそういうものを取り入れれば良いと思います。とくに『コワすぎ！』は予算がないですから、アイデア勝負なのです。どんなに頑張っても、ハリウッド映画に勝てるクオリティの合成は無理です。しかし、お金のかからないアイデアやレイアウトなら勝負し拮抗することができるはずで、そこに賭けています。もちろん人によってはアチャーと思う人もいるでしょうが、私としてはフィクションを前提としているので何の問題もないのです。今後もビジュアルのアイデアはあるので、ガンガンやっていきますよ！

INSPIRE

『コワすぎ！』が影響を受けたものを羅列してみました

『Xファイル』――――――――――――――――――――

基本的には日本のXファイルを目指して始めましたが、今や完全に別物ですね。

『ＡＫＩＲＡ』――――――――――――――――――――

金田が工藤の要素になっています。あと鉄雄の不気味なビジュアルには少なからず影響を受けていると思います。今後、どこかで出てくるかもです。

『ゴーストハンターズ』――――――――――――――――――――

怪異に無鉄砲に向かっていく主人公、そしてキャラ立ちした異界の者たちや冒険のハラハラワクワク感は影響を受けています。

『妖怪ハンター』――――――――――――――――――――

諸星大二郎さんの漫画です。これは私の異界ものでは常に影響大です。というか、これだけではなく諸星大二郎さんの漫画には大いに影響を受けています。人智を超えた存在の扱いが心にビシッとはまります。

『もののけ姫』――――――――――――――――――――

デイダラボッチの影響を受けています。実体ではなく霊体的な存在であるのがイイですね。

『巨神兵東京にあらわる』――――――――――――――――――――

この短編への反発心からクライマックス以降の展開が生まれました。

『ほんとにあった！呪いのビデオシリーズ』――――――――――――――――――――

基本は、私も撮ったことのあるこのシリーズが元になっていますね。

『矢追純一のＵＦＯ特番』――――――――――――――――――――

未知の不気味なものにワクワクする感覚、見世物精神、それらを学びました。

『(タイトル不詳の心霊番組)』――――――――――――――――――――

今回の劇場版では扱わなかったんですが、シリーズ中にたびたび花が出てくるのは、昔見た心霊特番で、ＵＦＯと交信するおばさんが、瞑想中に水を含んでコップに戻すと、その水に花弁が混じっているというシーンがあって、あの番組のおばさんの映像が今でも衝撃的に残っていて、花の登場になっています。あれは何という番組だったのか。タイトルが知りたいですね・・・。

『ありふれた事件』――――――――――――――――――――

工藤の原型はこの映画に出てくる人殺しのベンです！偶然にも顔つきが少し似てます。

KOWASUGI WORLD

『コワすぎ！』関連作品を劇中の時系列で並べました

『戦慄怪奇ファイル コワすぎ！ FILE-01【口裂け女捕獲作戦】』

『Kudo's Secret』（曇天小屋） 出演：大迫茂生/白石晃士

『戦慄怪奇ファイル コワすぎ！ FILE-02【震える幽霊】』

『To the Other Side』（曇天小屋） 出演：清瀬やえこ/久保山智夏

『失踪した女優・石橋杏奈』（TBS） 出演：石橋杏奈/吉岡睦雄/はるうらら

『GOOD-BYE』（曇天小屋） 出演：村上ROCK/河村はるか

『戦慄怪奇ファイル コワすぎ！ FILE-03【人喰い河童伝説】』

『Mystery Man』（曇天小屋） 出演：大迫茂生/村上ROCK

『戦慄怪奇ファイル コワすぎ！ FILE-04【真相！トイレの花子さん】』

『Her Brother』（曇天小屋） 出演：久保山智夏/関口崇則/大迫茂生

『戦慄怪奇ファイル コワすぎ！ 劇場版・序章【真説・四谷怪談 お岩の呪い】』

『戦慄怪奇ファイル コワすぎ！ 史上最恐の劇場版』

CAST & STAFF

【ＣＡＳＴ】

大迫茂生　久保山智夏　白石晃士

宇賀神明広　小明　金子二郎

大畠奈菜子　金子鈴幸

吉田悠軌　平川和宏

舘野豪　村上ＲＯＣＫ　小西平祐　石川ゆうや

藤原章　はるうらら

大蔵省　西山真来　柳川凌嘉

五頭兵夫

【ＳＴＡＦＦ】

監督・脚本・撮影・ＶＦＸ：白石晃士

製作統括：原啓二郎

プロデューサー：三上真弘／田坂公章

助監督・音響監督：中川究矢

録音：根本飛鳥

録音応援：乙幡優

特殊造形・イラスト：相蘇敬介

特殊造形助手　堤瑠衣子　根岸弥生

ヘアメイク応援：村木アケミ

編集・予告編：宮崎歩

スチール：伴貞良

製作主任：小谷不充穂

監督助手・メイキング：谷口恒平

制作進行見習い：加藤誠

制作デスク：立石倫子

制作プロダクション：ビデオプランニング

製作：ニューセレクト

２０１４年／日本映画／日本語／カラー／８０分／STEREO／16：9 ビスタ　（C）ニューセレクト